

木トトギス

四月号

木トトギス

昭和二十六年三月二十日 滋賀県立特別教育会 創立二十周年
明治三十二年三月二十日 滋賀県立特別教育会 創立二十周年
昭和二十六年三月一日 発行 第一頁 一巻 第四号



俳句随想〔二百九十八〕

汀子

昨年末から原因不明の肋間神経痛に悩まされ仕事が出来ないでいるのに、とうとう一月二十四日のその日が来てしまった。この日は大阪大学で学生と一般参加の市民を対象として特別講演を依頼されていたのであった。

題は「俳句の表現——伝えるのは意味かイメージか——」と予めお伝えしてあった。

覚悟を決めて教壇に立つと階段教室の中央から前の方に陣取っているのはこの大学の名誉教授や錚々たるOBばかりである。しかし皆よく存じ上げているホトトギスの仲間であった。この方達が約三十名、応援団よろしく堂々と布陣してその威容はあたりを圧しているのである。学生はと言うと、約三十名、OBの隙間隙間でノートを前にしてきらきら光る目で私を注視しているのであった。教室はもう立錐の余地もなかった。

私は先ずソシユールの「一般言語学講義」に言及して、言語には統辞の軸と連想の軸という二つの軸があるということから話し始めた。

旬日記

汀子

平成十八年四月一日 芦屋ホトギス会

片づけて客間に残す 桃の花
桜見てほしきぐり戸開けて置く
忘れぬしエーブルフルにつかまりし
四月二日 関西野分會
ふらここに雨上りつつありしかな
メッセージ残す留守電金鳳華
ふらここや世界の少し広がる
盛りには旅にありくつ金の華
残りたる稿債いくつ金鳳華
四月二日 下萌旬會
一日で咲き進みたる花の雨
ものふの心抱きぬ利休の忌
雨止んで摘草の野に光置く
霞みたる富士の所在を又探す
四月三日 ロイヤル俳壇
記念館軌道に乗りし虚子忌かな
歸路は目にとび込んで来る春の月
吉野山 桜いかにと旅支度
花の旅 花の遅速にかゝはらず
四月八日 虚子忌
虚子百句捧げて迎ふ虚子忌かな
うららかにありて忌日の心かな
みよしののの花の旅待つ忌日かな
四月九日 悼 後藤一秋様
咲けば散る花の命と知りみても
耐へに耐へせめて虚子忌を待たれしと
四月十一日 大阪倶楽部
み吉野の花の遅速にゆだねけり
春暁を発ち常の如旅にあり
み吉野の花の刻々知らざる
春深し心のついて行けぬほど

動かざる蛙の目あり動きけり
四月十一日 綿業倶楽部
帰る人あり泊る人春の宵
桜草よりほどけゆく旅疲れた
司会にも手をかす春の宵更け
桜見るまでは吉野を語られず
四月十三日 清交社

この辺の花の遅速におしはかる
香をほどこよりの存在沈丁花
春昼の庭に咲くもの終はるもの
みつまでも道路の近づく春の雨
助けんとしたる子猫の立てし爪
四月十四日 工業倶楽部
いつまでも弥生の陽気とのはず
沈丁花 香のほどけぬし旅歸り
雨上り来し明るさの百千鳥
百千鳥 山路これより下り坂
四月十五日 吉野山 くらつき
満開の花に傾く 棧敷かな
止みさうに止みさうに又花の雨
みよしののの雨の風情を花に置く
太陽の所在のありし花の雨
軽々と雨の落花でありしかな
み吉野の花人となる旅路あり
又くらつき 第二旬會
又一人庭に出てみる 臚かな
夜桜に庭の奥行生れけり
星屑雲に動きのあることを
花麗も水面の位置を語るもの
四月十六日 くらつき 第三旬會
着重ねて花衣とはもう言へず
山の雨落花を誘ひ来ること
くらつき 第四旬會
全山の花散らす風待つばかり
家路へと切り替へゆける花心
四月十八日 有恒倶楽部
み吉野の旅はや遠し花曇

辛夷咲く限り山路の目印に
乙訓に始まってぬし竹の秋
秘密見しかに鳥の巢を見つけたる
庭師にも手に余りたる鳥の巢
四月十八日 無名会

み吉野の邸ぶりなりし桜餅
球根の主に見せたまきチュリッ
わが庭の爛漫の春案内せん
咲き替る今チュリッ開けし庭
好き嫌ひなきと信じて桜餅
しやがんで立ち上りてもチュリッ
四月十九日 夏潮旬會
咲く吐息散るため息も惜む春
刻々とふふむくれなぬ黄桜に
見たかりし島原太夫道中を
又次の旅へ持ち越す花疲
四月二十日 句會と講演の會
花の旅終へてつゞきのごと家居
菜り来し花の旅路を語らばや
咲き継げる花の遅速を問うて旅
四月二十七日 きざらぎ会
あともどり又あともどり春深し
滞在の雨も落着く春深し
みよし野の花の消息絶えし雨
畦道に足をとられし蛙かな
跳び出せしものが蛙と分るまで
四月二十八日 時雨旬會
彗星のうはさちらほら春の近く
もの忘れしちらほら春の近く
花ことば忘れて勿忘草かな
行春の花の消息消えて行きにつ
蝶々に山路の尽くること
四月三十日 野分會
ふらここや風雨の荒れし日の孤高
ふらここに待つ彗星をあきらめ

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年四月三日 はせを句会

弟に結婚話 亀鳴けり
鎌倉や椿寿忌前の喧騒に

四月四日 一水会

目刺手に政治談議の始まりぬ
みよし野といふ色艶にさくら餅
花を訪ふ遠隔の子を訪ふやうに

四月六日 蕉心会

この風に怯えて高橋の花よ
エープリルフル顔して猫は餌を
水尾交差して春の水らしくなる
カレーパン具の流れ出て口うらら
蝌蚪生れて三角池の独立す
花咲きて蕉心会は七年目
春風に進む術なき鴟かな
港町空港現れて里うらら
タクシーを飛ばし着く人句座うらら
朝早く虚子忌準備もして句座へ

四月八日 虚字忌

悲しみはいつか思ひ出初音聞く

四月十日 朝口カルチャー若草句会

淡々と忌日の花でありにけり

鳥集ひ皇居の濠の水温む

天地は神の造化や落花舞ふ
一佳人花の命のやうに逝く

四月十三日 土筆会

人悼むごと辛夷咲きこぶし散る
巢立鳥まだ蒼天に逆らへず
巢立鳥風が囀してをりにけり
辛夷咲き終る名妓の物語

四月十五、十六日 吉野くつろぎの旅

あの枝垂桜の下に梯を
枝といふ落花の橋掛りであり
北を向く後醍醐帝に花の雨
花見茶屋推敲七分酒三分
吉野山雁字搦めにして桜
花の黙解く雨脚でありにけり
夜桜となり雨上る星現るる
朝風呂に朝飯に朝桜かな
落花一片日当りながら神となる
四月十七日 はいくの学校
暖かく生徒自然に囲まれて

四月十八日 草木瓜会

ビルの先伸びゆくまに空うらら
雲去来しては四月を揺さぶりぬ
忌心に祝ぎの心に四月かな
犬好きの人猫好きの人うらら
咲くもののあり散るものあり四月

四月十九日 吉村ひさ志先生を偲ぶ会

春灯を明るうせよと師の笑顔
霾に俳誌の未来隠せざる
忌心を残んの花にをさめけり

四月二十日 登高会

濃山吹日出づる国の片隅に
種蒔を待つ土の色風の色
蜜蜂の一刻といふ運命かな
汝が為に咲く花の種蒔きにけり
四月二十二日 ホトギス社句会

亀鳴くや今年阪神あかんかも
風神の休息花の吉野かな
落花より明日へ繋いでゆく吉野
四月二十五日 若水会

山葵田の水味を決め辛さ決め
山葵田を曲れば峽の生活かな
遠足の列を引き裂く交差点
花板の手練に山葵下ろされし
天城越え難きは昔山葵漬

四月二十六日 目黒学園句会

石鱗玉子等の未来を乗せて発つ
チューリップ夕日に溶ける赤であり
チューリップ星の瞬き吸ひ込めり
春暁や猫帰り犬目覚めゆく
赤は君黄色は僕のチューリップ
春暁のビルの先より動き初む

雑詠

廣太郎 選

降り立てばまた会へさうな冬の駅
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 こんなにも人を泣かせて冬に逝く
 忘れ得ぬ笑顔心にしまふ冬
 同
 みちのくの冬野の星となられしか
 東京 大久保白村
 恵子亡き羽後路の冬野いかばかり
 同
 綿虫や面影偲ぶ清記席
 同
 覚悟してゐても解けざる露寒し
 宝塚 水田むつみ
 逝きしよりさらに身近や花八手
 同
 寒菊や篤き思ひを継ぎゆかん
 同
 冬帝に迎へられたる御霊とも
 神戸 千原叡子
 みちのくに雪来ぬうちに旅立たれ
 同
 霜枯に色保ちつつ黙すもの
 同
 逝く秋や俳磚故人一人増え
 同 五十嵐哲也
 秋深し虚子知る人のまた減りて
 同
 偲ぶ人増えたる秋を惜みけり
 同
 一天のもと一水の冬川原
 長岡 安原 葉
 冬帽を深くかむりて人目避く
 同
 関西は冬近き日と思はれず
 同

ともかくも太地にくれば鯨鍋
 榎原 稲岡 長
 暫くはとけぬ日裏の霜柱
 同
 霜柱かけら積む音微かな夜
 同
 冬帝の家来のやうな夕木立
 神戸 長山あや
 水鳥の旅の時間をほどく水
 同
 露けしや大地の底は海といふ
 同
 別々の目が別々の鳩捉ふ
 香川 湯川 雅
 日に潜み咲いて日の色石路の花
 同
 発想の転換難し落葉踏む
 同
 抱いて欲しさうにも置かれある火桶
 神戸 後藤立夫
 冬めいて来たるは時間かも知れず
 同
 日向ぼこして自画像のやうになる
 同
 神の留守わが腸のぞく内視鏡
 東京 内藤呈念
 点滴架ひきずりながら日向ぼこ
 同
 風に運まかせ大綿まよひなし
 同
 大往生なりしと聞きぬ冬の菊
 神戸 山田弘子
 石の街にも末枯のすすむ景
 同
 夜は鹿を寄する山湖の月明り
 同
 海を向く風除垣の頑固かな
 東京 橋本くに彦
 冬日和君とぼくとの影にかな
 同
 二次会に新酒待たせて句会かな
 同
 阿波の空風水と土藍茂る
 徳島 上崎暮潮
 初蟬の声の波立ちはじめたる
 同
 病み抜けしからだどころ法師蟬
 同

雑詠句評（三月号より）

芳子・葉・明倫

憲明・静龍・中正

保佳・美奇・むつみ

千鶴子・廣太郎

シベリウス共に聴きゐる通夜の月

宝塚

水田むつみ

シベリウスは青虎様の愛唱歌であり、御生前から、遺言にも残されていたと聞く。ホ誌一筋に伝統俳句を守られた生涯であり、情熱の俳人であった。十二月十一日の姫路キャッスルホテルでの、偲ぶ会の日は二百人近い人が追悼し、在りし日のスナップを数々映写された時もシベリウスの曲を流された。通夜の日は密葬でお内輪で送られたというが、丁度満月に近い美しい月夜であった。その夜も遺言通りシベリウスの曲で見送られたのであろう。通夜の月と共に素晴らしい俳句の道を全うされ、天国の諸先生の許へと旅立たれたのであった。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。（芳子）

一見して、桑田青虎氏の御通夜である。青虎氏は、生前筆者と

音楽の話をした時、ジャック・テイボーという有名なヴァイオリニストと、シベリウスのヴァイオリン協奏曲がお気に入りであったという事を聞いた記憶がある。正に氏をお送りする音楽と、月の輝きの侘しさである。（廣太郎）

足さすりくれし吾子の手あたたかし

姫路

故桑田青虎

作者は平成十八年十一月二日朝、享年九十三歳の生涯を閉じられた。すばらしい活躍をされたご生前をお偲び申しあげ、謹んで哀悼の意を表します。病床にあつても「世界一周の旅をしたいなあ」が口癖だったという作者の逞しい好奇心を生み出す詩ところは、最後まで枯れることはなかったのであろう。

完全看護の病床で、「傍で泊っていても私が出来ることは何もなかった。ただ声をかけ、足をさするだけであった。」というお子様の言葉にも符合する情景のこの句、実に平明に叙されていて余韻が深い。季題「あたたかし」からは、親子の縁、親子という出遇いを賜った作者の命への謝念まで伝わってくる。（葉）

足をさすっておられるのは水田むつみ氏であろうか。病床での家族の看取りは病人にとってどれだけ励みになるか。家族の愛情を一身に受けて心の和む姿が見て取れる。何といつても「あたたかし」という季題が、本来の意味を超越した神々しいまでの響きを醸し出している。（廣太郎）

天地有情

江子選

猿酒に酔ひうたかたのごと会話

西宮 本郷桂子

書写風落葉片寄せ先師句碑

同 たつの 浅井青陽子

萩も刈りつゝしみ侍る先師の忌

同 東京 稲畑廣太郎

落鮎の姿に焼かれたる哀れ

同 東京 稲畑廣太郎

水歪むより落鮎の色となる

同 榎原 稲岡 長

臘梅の香の溜りゐる門の内

同 長岡 安原 葉

人悼み秋惜みつつ来し旅路

同 東京 今井千鶴子

知らされし若き人の訃風寒し

同 東京 今井千鶴子

待春の机辺乱れて一書あり

同 福岡 松尾緑富

池覆ひ尽くして布袋葵咲く

同 眞面 井上浩一郎

枯れ尽きることなき布袋葵とか

同 徳島 上崎暮潮

梟やのぼり切つたる森の月

同 徳島 上崎暮潮

あめつちのしづけき声にしぐれけり

同 徳島 上崎暮潮

老といふ坂上りつつ盆の月

同 徳島 上崎暮潮

未来とはかく光るもの青蜜柑

同 徳島 上崎暮潮

吾が命暮れゆく年と歩を合せ

豊中 瀧 青佳

百歳を生きん不思議さ霜降る夜

同 福山 竹下陶子

滴りに岩息づいてをりにけり

同 福山 竹下陶子

なま陶の皿の歪める暑さかな

同 神戸 山田弘子

色を掃くたのしき日課散紅葉

同 神戸 山田弘子

墨を磨る女堂守冬紅葉

同 金沢 藤浦昭代

風除を頼むくらしも能登荒磯

同 熊本 岩岡中正

雪雲の層の底より青き空

同 熊本 岩岡中正

いのちみじかし秋の虹消えぬ間に

同 東京 内藤呈念

秋の虹消えてたましひのこりたる

同 東京 内藤呈念

冬耕す土への思ひ絶ちがたく

同 龍ヶ崎 今橋眞理子

冬耕の鋤夕照に金となる

同 龍ヶ崎 今橋眞理子

露の世にライバルとして友として

同 神戸 長山あや

約束と笑顔遺して逝きし冬

同 吹田 宮崎 正

年輪をひとつ育てし枯葉かな

同 吹田 宮崎 正

風も木も空も大地も枯れてゆく

同 吹田 宮崎 正

湖風の波頭より来る寒さ

同 吹田 宮崎 正

神農さん美穂女愛でたる虎を受く

同 吹田 宮崎 正

天地有情句評

汀子

薺粥その土の香を喜べり 樞原 稲岡 長

春の七種を炊き込んだ粥は人日の日に頂く。土の匂いが懐かし

い。

猿酒に酔ひうたかたのごと会話 西宮 本郷桂子

猿が木の股などに木の実を蓄え、雨が溜まって醸された猿酒を

飲んで酔った会話。

萩も刈りつゝしみ侍る先師の忌 たつの 浅井青陽子

先師の忌日を迎える真摯な作者の一日の過ごし方。

水歪むより落鮎の色となる 東京 稲畑廣太郎

鮎は産卵のため川を下ってくる。流れがまがると背や腹の色が

はつきり見えて哀れを誘う。

人悼み秋惜みつつ来し旅路 長岡 安原 葉

親しい人の死を悼み秋を惜みつつ旅を続ける作者の心情。

待春の机辺乱れて一書あり 東京 今井千鶴子

机辺を片づけなければと思ひながら一書を繙き春を待つ心。

池覆ひ尽くして布袋葵咲く 福岡 松尾緑富

池の水面を覆って布袋葵の花が咲いている。力強い花の姿。

鼻やのぼり切つたる森の月 真面 井上浩一郎

昼間寝ている鼻に夜の時間がやって来た。森を照らす月も昇つ

た。